

『欽定訳聖書』に使われた *wroth* と *angry*

竹田津 進

1. はじめに

英語の歴史の中で、「怒り」を意味する形容詞は、古英語以来 *wroth* が最も一般的に使われていたが、中英語後期になると、デーン人すなわちバイキングの古ノルド語から英語に入った *angry* が *wroth* に取って代わるようになる。*wroth* と *angry* の交替の歴史を明らかにした拙論では¹⁾、近代英語初期の作家・作品のうち、詩人スペンサー (Edmund Spenser, 1552?-99) の作品と『欽定訳聖書』(1611) 以外は *wroth* が衰退し、*angry* が優勢になっているのが観察された。スペンサーに関する論考はすでに報告したので²⁾、本稿では、近代英語に甚大なる影響を及ぼした『欽定訳聖書』³⁾における *wroth* と *angry* について考察する⁴⁾。

まず、中英語から現代英語における主要な英訳聖書を見ていこう。中英語後期には、神学者で異端とされた宗教改革者のウィクリフ (Wycliffe, c1330-84) の聖書がある。これは、イギリス初の英訳聖書で、前期訳 (1385) と後期訳 (1395) とがあり、活版印刷導入以前のことであるから、手書きの写本が250種近く残っている。

近代英語初期には、「鋤を引く少年」にも聖書が読めるようにと願いつつ、殉教した改革者ティンダル (Tyndale, c1492-1536) の、「新約聖書」「モーゼ五書」「ヨナ書」を翻訳した聖書がある。ティンダルの聖書は、この後に続く聖書や『欽定訳聖書』の基盤となった重要な聖書である⁵⁾。時代の宗教政策の荒波に翻弄されながらも、ティンダル訳を含む5つの聖書を基

に聖書を完訳したカバーデイル(Coverdale, 1488-1568)は、ティンダル訳を後世に伝えるのに大きな功績を果たした。『マシュー訳聖書』(*Matthew's Bible*, 1537)は、ティンダル訳を軸に、カバーデイル訳で補った聖書であるが、国王ヘンリ8世から正式認可された。『マシュー訳』の改訂のため、カバーデイルが編集者に任命された『大聖書』(*The Great Bible*, 1539)は、縦42cm×横28cmという文字通りの大型聖書であった。

カトリックの女王メアリー世の迫害を逃れた改革者たちがスイスのジュネーブで出版したのが『ジュネーブ聖書』(*The Geneva Bible*, 1560)である。イギリスでも広く読まれ成功を収めたが、イギリス国教会の主教達は、その聖書のカルビン派的傾向を厭い、『主教訳聖書』(*The Bishop's Bible*, 1568)を手掛けた。これは『大聖書』と『ジュネーブ聖書』の折衷訳といわれる。ジェームズ一世の号令のもと1611年に刊行された『欽定訳聖書』(*the Authorized Version of the Bible (AV)*)はこれら聖書の集大成とも言え⁶⁾、英訳聖書の金字塔となった。

なお、最初のカトリック英訳聖書として、カトリック教徒が大陸へ逃れ、ドーエイとリームズで作成した『リームズ・ダウエイ聖書』(*The Rheims and Douai Bible*, 1582-1609/10)がある。この聖書をカトリックの司教チャロナーが数度にわたり改訳したのが『チャロナー改訳聖書』(*Challoner's Revision*, 1749-72)である。

現代英語になると、アメリカで刊行され、プロテスタントの公認訳となった『改訂標準訳聖書』(*Revised Standard Version (RSV)*, 1946-52)から、時代を超えた英語(timeless English)での翻訳を目指したイギリスの『新英訳聖書』(*The New English Bible*, 1970)へと英訳聖書の歴史は続く。

『ウィクリフ訳聖書』から『新英訳聖書』までの各聖書における *wroth* と *angry* の使用頻度を、電子テキストを使って調べた結果が下の表1である。ティンダルの聖書の合計総数が少ないのは未完訳のためである。また、聖書間での使用総数の違いは、他の怒りを表す語や表現が使われているからである。

表1 主要な英訳聖書における *wroth* , *angry* の使用頻度

	<i>wroth</i>	<i>angry</i>
『ウィクリフ訳聖書(後期訳)』(1395)	168	0
『ティンダル訳聖書』(1534)	17	34
『カバーデイル訳聖書』(1535)	66	74
『マシュー訳聖書』(1537)	62	103
『大聖書』(1539)	68	86
『ジュネーブ聖書』(1560)	39	121
『主教訳聖書』(1568)	62	99
『欽定訳聖書』(1611)	55	60
『リームズ・ダウエイ聖書』(1582-1609/10)	0	144
『チャロナー訳聖書』(1750-52)	0	162
『改訂標準訳聖書』(1946-52)	1	120
『新英訳聖書』(1970)	0	117

中英語から現代英語へという大きな流れの中で、*wroth* から *angry* への交替の歴史は明白である。中英語後期のウィクリフでは *wroth* のみであったのが⁷⁾、近代英語初期になると、*wroth* と *angry* とが競合関係にあり、中世から近代への過渡期であることや、個々の聖書の特徴が錯綜した状況であることを示している。ティンダルの語法は、同時代の英語に近いが⁸⁾、カバーデイルは *wroth* も多用している。『ジュネーブ聖書』では *angry* が優勢で、カトリックの『リームズ聖書』になると *angry* 一辺倒というような⁹⁾、個々の聖書における両形容詞の使用頻度には大きな揺れが見られる。この過渡的な数十年を経て、『欽定訳』では、カバーデイルの用法を踏襲している面はあるが¹⁰⁾、すでに衰退しているはずの *wroth* が相対的に増加するという、一見、時代に逆行した傾向になっている。以下の節で、『欽定訳』における *wroth* と *angry* のふるまいを考察していきたい。

2. 文体・語法的考察

2.1 文体

近代初期の作家・作品では *angry* が主流になっていく中で、当時の英語に近かったと思われるティンダルの聖書と『欽定訳聖書』を比べると、ティンダルが *angry* を使ったところで、『欽定訳』では *wroth* になっているところが次の2例を含め7箇所あり¹¹⁾、『欽定訳』の古色さがうかがわれる。

(1) a. ティンダル And Pharao was **angrie** with them.

『欽定訳』 And Pharaoh was **wroth** against two of his officers.

(「創世記」40: 2)

b. ティンダル [I]t waxe full of wormes and stanke and Moses was **angrie** wyth them.

『欽定訳』 [I]t bred worms, and stank: and Moses was **wroth** with them.

(「出エジプト記」16: 20)

ティンダルの方が現代的で、『欽定訳』が古く感じられるという見方もあるので (Daniel, 1994: 303)、『欽定訳』では、古語になっていた *wroth* を使うことによって、古風で荘重な文体を作り出すという、文体的配慮がされていると考えることができるであろう。Weigle (1950: 52) は、『欽定訳』の英語は少なくとも75年前の英語に遡る (“it [the language of the Authorized Version] went back at least seventy-five years, to the time when Tyndale made his translations”) と具体的な数字をあげているし、Gordon (1966: 100)、McKnight (1968: 257)、Partridge (1973: ch.7)、Hughes (2000: 160) など、『欽定訳』の古語法についての言及や例証は枚挙に暇がない¹²⁾。

ただし、古風かつ荘重な文体を目論んで、*wroth* が *angry* の代わりに無作為に使われたのかどうかという点については、再考の余地がある。何らかの理由で両者の使い分けがされている可能性があるからである。

2.2 文法・意味

文法的には、(2) のように *wroth* はすべて叙述用法である。(以下、適宜日本語聖書訳をつけている。)

- (2) And Cain was very **wroth**, and his countenance fell.

[カインは怒り、顔を伏せた] (『創世記』4:5)

angry の中には、(3) のような限定用法もあるが (60例中7例)、(4) のように大部分は *wroth* 同様、叙述的に使われている。

- (3) Make no friendship with an **angry** man; and with a furious man thou shalt not go:

[怒りっぽい者と交わってはいけない...] (『箴言』22:24)

- (4) God judgeth the righteous, and God is **angry** with the wicked every day.

[神は正しい審判者。日々、怒る神] (『詩編』7:11)

とすると、Spenser のように、*wroth* は叙述的に、*angry* はほぼ限定的にという、文法上の差異による説明はできない。

意味的には、*OED* において、*wroth* に “very angry” (sv. *wroth* 1) という定義があるから、*wroth* の方が *angry* よりも強い「激怒して」という意味で使われていることも考えられる。しかし、(5) のように類似のコンテキストで両者が使われているのを見ると、この説明も成立し難い。

- (5) a. But when the king heard thereof, he was **wroth**: (『マタイ伝』22:7)

b. Now when the king heard this, he was **angry**, (『マカバイ記一』6:28)

OED の記述にあるように (sv. *wroth* 1b, ‘Said of the Deity’), *wroth* は神の怒りの描写に使われる用法と取れなくもない。確かに、怒った神の描写に *wroth* が使われることもあるが、(6) のように怒れる神を描写するのに

は、『欽定訳』では *angry* が使われることが多く、逆に、(7) のように人にも *wroth* が使われているので、「神」と '*wroth*' という特殊なコロケーションの可能性は消える。

(6) And he said unto him, Oh let not the Lord be **angry**, and I will speak:

(「創世記」18:30)

(7) Then was Abner very **wroth** for the words of Ish-bosheth.

(「サムエル記第二」3:8)

3. 共起する主語と動詞形

3.1 主語による使い分け

主語による使い分けがもしかすると意図されているのではないかという推測から、『欽定訳』における *wroth* と *angry* の主語として何が使われているか調べてみると、巻末の付表のような結果が得られた。表の読み方は、例えば、「創世記」4章5節の主語は、(2) におけるように Cain である。主語が、次の(8)のように代名詞のときは、*thou* [Cain] のように、その指示する名詞を [] に入れている。また、命令文や不定詞などで、明示されていない主語を補って考えないといけない場合がある。次の、(9)a の意味上の主語は *brother* であり、(9)b の主語は、総称的な *he* である。表では、[brother] や [he] のように示している。

(8) And the LORD said unto Cain, Why art thou **wroth**? and why is thy countenance fallen? [なぜ、あなたは憤っているのか...](「創世記」4:6)

(9) a. Then Tobit said, Thou art welcome, brother; be not now **angry** with me,

(「トビト記」5:13)

b. It is much better to reprove, than to be **angry** secretly:

[怒りは胸にしまっておくより吐き出した方がよい。](「シラ書」20:2)

この表から、こういう怒りの形容詞は「新約聖書」より「旧約聖書」においてはるかに多く使われていることがわかるが、これは「旧約」の性格にあると言えよう¹³⁾。また、「旧約」の最初の方の書において、(10)のように、固有名詞や特定の人が主語のときは *wroth* が使われ、(11)のように、神や主と不特定の人が主語のときには *angry* が使われる傾向が見られる。

(10) a. And Jacobe was **wroth** and chode with Laban. (「創世記」31: 36)

b. And the princes of the Philistines were **wroth** with him.

(「サムエル記第一」29: 4)

(11) a. How long, LORD? wilt thou be **angry** for ever? (「詩編」79: 5)

b. He that is soon **angry** dealeth foolishly: and a man of wicked devices is hated.

[短気なものは愚かなことをし、悪をたくらむ者は憎まれる。](「箴言」14: 17)

wroth の主語としては、Cain, Jacob, sons of Jacob, Pharaoh, Moses, Saul, the princes of the Philistines, Abner, king David, Naaman, Asa, Uzziah, Sanballat, Sanballat and Tobiah and the Arabians and the Ammonites and the Ashdodites, Bigthan and Teresh, Herod など固有名詞が多い。一方、*angry* の主語として登場する固有名詞は Nabuchodonosor のみである。固有名を指示代名詞で示している例が1例 (Moses) ある。3つの書で、その話者「私」が怒る例が3例あるが (Nehemiah, Ezekiel, Jonah) 文中で固有名詞を直接指示しているわけではない。

主語が神や主の場合、*angry* が多く使われていて、特に「旧約」の「歴史書」や「教訓書」に目立つようである。*wroth* も使われてはいるが、神や主が *angry* とのみ共起することの単調さを避けるために使われているような印象を受ける箇所もある。例えば、「申命記」では、2つの形容詞がほぼ交互に使われており、「詩編」でも、それに近い傾向が伺える。こういう特徴は、翻訳に関わった特定の班の担当した箇所であり、翻訳班との関連が注目される。

『欽定訳聖書』の翻訳は、6つの班(計47名)によって遂行されたわけであるが¹⁴⁾、上で述べた特徴は、ウェストminster第一班(First Westminster Company)の翻訳した「創世記」から「列王記二」で顕著であり(「申命記」は除く)、ケンブリッジ第一班の「歴代誌第二」から「雅歌」や、ケンブリッジ第二班の担当箇所でも見受けられる。但し、他の班の担当した箇所は必ずしもこういう傾向にあるわけではない¹⁵⁾。オックスフォード第一班の担当した「預言書」においては、主語の代名詞の指す「主」には *wroth* が、固有名には *angry* が使われている。ケンブリッジ第二班の担当した「外典」では *angry* が多く使われているし、オックスフォード第二班担当の「新約」では、不特定の主語(whosoever, ye, a bishop など)には *angry* が多いという具合であり、それぞれの班に特有の翻訳の特徴、あるいは癖とでもいうものがあるようである。

不特定の人を主語とする用法については、上の(11)bや、次の(12)のように *angry* に限られ、*wroth* にはない。

- (12) But I say unto you, That whosoever is **angry** with his brother without a cause shall be in danger of the judgment: [兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでも裁きを受けなければなりません。](「マタイ伝」5:22)

また、(13)aのような限定用法の *angry* も、(13)bのような叙述的な言い換えが可能という意味では、いわば不特定の人を指す用法とも言え、*angry* の限定用法はいずれもこのように不特定の人を示している。

- (13) a. It is better to dwell in the wilderness, than with a contentious and an **angry** woman [争い好きで、うるさい女といるよりは、荒野に住む方がまだましだ。]
(「箴言」21:19)
- b. It is better to dwell in the wilderness, than with a woman who is contentious and **angry**.

3.2 動詞形による使い分け

この節では、動詞の形や機能、特に時制や相、法に着目して、*wroth*, *angry* の使い分けの可能性がないか見てみたい。*wroth*, *angry* が共起している動詞の形は、過去形、現在形、現在完了形、原形、および非定形 (non-finite form) である。非定形としては、原形不定詞、to 不定詞、現在分詞が使われている。原形は命令文や仮定法において、原形不定詞は助動詞とともに、現在分詞は分詞構文に使われている。使われている動詞はすべて *be* 動詞である。以下に原形や原形不定詞の用例をいくつかあげておく。(14) は原形が仮定法や命令文で使われている例、(15) は原形不定詞が助動詞と共起する例である。(16) は to 不定詞の例である。

- (14) a. If they sin against thee, (for there is no man that sinneth not,) and thou **be angry** with them, [彼らがあなたに対して罪を犯したため...あなたが彼らに対して怒られ...るなら] (「列王記第一」8: 46)
- b. **Be ye angry**, and sin not: let not the sun go down upon your wrath. [怒っても罪を犯してはなりません...] (「エペソ人への手紙」4: 26)
- c. Now therefore **be** not grieved, nor **angry** with yourselves, that ye sold me hither: [今、私をここに売ったことで、心を痛めたり、怒ってはなりません。] (「創世記」45: 5)
- (15) a. O LORD God of hosts, how long wilt thou **be angry** against the prayer of thy people? [いつまで、あなたの民の祈りに怒りを燃やしておられるのでしょうか。] (「詩編」80: 4)
- b. [W]herefore should God **be angry** at thy voice, and destroy the work of thine hands? [神があなたの言うことを聞いて怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてよいのだろうか。] (「伝道の書」5: 6)
- (16) And God said to Jonah, Doest thou well to **be angry** for the gourd? And he said, I do well **to be angry**, even unto death. [「このとうごまのために、あなたは当然のことに怒るのか。」「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」]

(「ヨナ書」4:9)

2つの形容詞がどの動詞形と共起するかを調べた結果は、同じく巻末の付表に示している。(表中で、以下の点を補足表示した。共起する助動詞、to不定詞のto、仮定法のコンテキスト(if, though, lestとの共起)、命令文には!、疑問文には?という記号など。)付表から、次の表2におけるような数値が導きだせる。

表2 *wroth*, *angry* と共起する動詞形

	<i>wroth</i>	<i>angry</i>
過去形	41	20
現在形	3	5
現在完了形	1	0
原形	3	11
非定形	6	16
(原形不定詞)	(5)	(9)
(to不定詞)	(0)	(5)
(現在分詞)	(1)	(2)

特徴的なのは、*wroth* が過去形との共起が多いこと、*angry* が原形や不定詞とともに多く現れていることである。*angry* も過去形と共起しないわけではないが、*wroth* の半分であるし、*wroth* が原形や不定詞と使われるのは、*angry* の3分の1でしかない。

wroth が過去形とともに、*angry* が原形や不定詞と共起することが多いのはなぜだろうか。過去形で現れるということは、当然ながら過去の事実であるから、感情の主体者が「怒り」をすでに経験していることを意味する。現在完了形(「詩篇」89:38)も同様に「怒り」を経験しているということになる。

一方、原形が仮定法、命令文などと共起するということは、(14)のよう

に、現実ではないことや、かくあれということであるから、現実にはまだ起こっていないことである。また、原形不定詞が未来時制や義務、蓋然性などの助動詞と共に起るということは、(15)のように、未来のことや、「～すべきである」、「～かもしれない」ということで、これも現実にはまだ生起していないことである。つまり、いずれも、感情の主体者が、まだ「怒り」を経験するところまで至っていないということになる。To 不定詞の場合も、不定詞には未来指向という意味が含意されるので¹⁶⁾、(17)のように、今現在「怒っている」という意味を含まないこともある。

(17) Be not hasty in thy spirit to **be angry**: for anger resteth in the bosom of fools.

[軽々しく心をいらだててはならない。いらだちは愚か者の胸にとどまるから]
(「伝道の書」7:9)

現在形についても両者には違いが見られる。*wroth* の場合は、(8) や、次の(18)のように、今現在、主語が「怒っている」という心理状態である。

(18) a. [B]ehold, thou **art wroth**: for we have sinned, [ああ、あなたは怒られました。私たちは昔から罪を犯し続けています。] (「イザヤ書」64:5)

b. But thou hast utterly rejected us; thou **art very wroth** against us.

[今私たちを見捨てられるのですか。そんなに怒られたのですか。] (「哀歌」5:22)

それに対して、同じ現在形でありながら、*angry* の場合、(11)b や (12) のように、不特定の主語と絡むこともあるせいか、今現在というより、時に限定されない、性格や性質というような心理状態であったり、上にあげた(4)では、*every day* という修飾語があることからわかるように、今「怒っている」というより、習慣的な心理状態を示していると言える。また、(19)は未来形の代用であるし、(20)は、「怒っている」かどうか訊いている疑

問文であるから、実際に怒っているかどうかは不明である。いずれも、今現時点で、主語が「怒り」を覚えているというような心理状態ではない。

- (19) Thou, even thou, art to be feared; and who may stand in thy sight when once thou **art angry**? [あなたが怒られたら、だれが御前に立ちえましよう] (「詩編」76:7)
- (20) **Are ye angry** at me, because I have made a man every whit whole on the sabbath day? [私が安息日に人の全身をすこやかにしたからといって、何でわたしに腹を立てるのですか] (「ヨハネ伝」7:23)

翻訳班との関連で言えば、ケンブリッジ第一班の担当した箇所が特に目につく。*angry* については、9例中8例の主語は神で、動詞は不定詞か原形であり、主語と動詞形の両方の特徴によく合致する。*wroth* の場合は、主語は、固有名詞と特定人物が合わせて7例、(神や主が主語の例もあるが)、動詞は12例が過去形であり、これも動詞形の特徴に一致する。特に、「詩編」では、動詞は、*wroth* の場合、過去形と現在完了形のみ、*angry* は原形不定詞、原形、現在形のみと共起しており、動詞形の特徴に驚くほど符号する。

wroth の場合、過去形であれ、現在完了形であれ、現在形であれ、主語が「怒り」をすでに経験したか、しているのに対し、*angry* は、原形不定詞や原形はもちろん、現在形と共起する場合も、主語が「怒り」をたった今覚えているというような心理状態ではない。なぜ、怒りを経験した人や、現在経験している人に対して *wroth* が多く選ばれ、今現在、まだ怒りを経験していない(かもしれない)人には、*angry* を使うことが多かったのか、偶然とは思えない、興味深い点である。

聖書という物語の中でそれ相応の意義を持つと思われる「怒って」という言葉に対し、翻訳者たちは、語源的には、英語の本来語であるゆえ身近な語として *wroth* には現実感や臨場感を、古ノルド語からの借入語である

angry にはある種の距離感や非現実感とでもいうような語感を意識しながら、登場人物の気持を描写しようとしたのかもしれない。

4. 結 び

「怒り」をあらわす、古英語以来の形容詞 *wroth* が、外来語の *angry* に交替する時期は、15世紀後半から16世紀頃にかけてである。『欽定訳聖書』の土台となり、当時の口語英語をよく映しているといわれるティンダルの聖書では、*angry* が優勢で、*wroth* の倍の頻度であらわれているのに、時代的に後の『欽定訳聖書』では、両者がほぼ同数になっており、*wroth* が復活し、時代を100年以上遡ったかのような印象さえ受ける。その理由としては、荘重で儼かな趣きを出すために、古語になっていた *wroth* が多く使われたのではないかという、文体的理由が考えられるであろう。

また、*wroth*, *angry* の使い分けには、その主語との関わりの可能性も考えられる。固有名詞や特定の人が主語の時には *wroth* が使われ、神や主、不特定の人には *angry* が多く使われる傾向が特定の書において見られる。この傾向は、『欽定訳』に関わった6つの翻訳班のうち、ウェストミンスター第一班が翻訳を担当した部分で顕著であり、ケンブリッジ第一班やケンブリッジ第二班の翻訳している箇所でも見られる。但し、こういう傾向は特定の書以外では、例外もあることを断っておかなければならない。

別の使い分けの理由として、動詞の形やその機能との関係が考えられる。*wroth* は過去形とともに、*angry* は原形や不定詞、つまり、命令文や仮定法、あるいは助動詞と共起することが多いようである。これは、怒りを経験した人や今経験している人に対して *wroth* が多く使われ、まだ怒りを経験していない人には、*angry* を使うことが多いことを意味する。この傾向はケンブリッジ第一班の担当した箇所において特に目につき、主語と動詞との共起の関連性も伺える。*wroth*, *angry* という形容詞と、主語や動詞形の選択に関し、特定の翻訳班に、ある意図か、あるいは翻訳の癖とでもい

うものが見られることは興味深いことである。

翻訳者達は、古語であった *wroth* を荘重で厳かな雰囲気醸し出すということを用意しながら、さらに、*wroth* には、英語本来語の身近な語として、*angry* には借入語としての語感を感じつつ、「怒って」という形容詞を使い分けようとしたのであろうか。

参考文献

- Daniell, David. 1994. *William Tyndale: A Biography*. New Haven & London: Yale University Press.
- Gordon, Ian A. 1966. *The Movement of English Prose*. London: Longman.
- Hammond, Gerald. 1982. *The Making of the English Bible*. Manchester: Carcanet Press.
- Hughes, Geoffrey. 2000. *A History of English Words*. Oxford: Blackwell.
- McKnight, George. 1968. *The Evolution of the English Language*. New York: Dover Publications.
- Nevalainen, Terttu. 2006. *An Introduction to Early Modern English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- OED = The Oxford English Dictionary*. 1933. Murray, James A. H., Henry Bradley, William A. Craigie, and Charles T. Onion, eds. Oxford: Clarendon Press.
- Partridge, A. C. 1973. *English Biblical Translation*. London: Andre Duetsch.
- Weigle, Luther A. 1950. *The English New Testament*. London: Tomas Nelson and Sons Ltd.
- 荒木一雄・宇賀治正朋. 1984. 『英語史ⅢA』大修館書店.
- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』開拓社.
- 市河三喜. 1937. 『聖書の英語』研究社.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説(改訂三版)』金子書房.
- 大塚高信. 1951. 『シェイクスピア及聖書の英語』研究社.
- 寺沢芳雄他. 1969. 『英語の聖書』富山房.
- 永嶋大典. 1988. 『英訳聖書の歴史』研究社.
- 橋本功. 1995. 『聖書の英語 - 旧約原典からみた - 』英潮社.

聖書

- The New Testament 1526*. tr. by William Tyndale. London: British Library. 2000.
- The Holy Bible, Authorized King James Version*. Oxford: Oxford University Press.
- The Holy Bible, King James Version*. Hendrickson Peabody, MA: Publishers. 2005.
- The Holy Bible, New Revised Standard Version*. Oxford: Oxford University Press. 1989.
- The New English Bible*. Oxford University Press/Cambridge University Press. 1970.
- 『聖書(新改訳)』日本聖書刊行会. 1970.

『聖書』フェデリゴ・バルバロ訳・講談社・1980。

『旧約聖書』関根正雄訳・教文館・1997。

電子テキスト

The Bible in English. 1996. London: Chadwyck-Healey.

The Modern English Collection. (<http://etext.lib.virginia.edu/modeng/browse.html>)

注

- 1) 「*Wroth* と *angry* の交替」。長崎県立大学論集第39巻3号(2005年: 109-121)所収。
- 2) 「Spenser, *The Faerie Queene* における *wroth* と *angry*」。日本英文学会九州支部大会第56回大会(2003年10月25日、鹿児島大学)における口頭発表。
- 3) 日本の英語学の草創期の泰斗である市河三喜博士は、『欽定訳聖書』について次のように述べている(1937: iii)。「1611年の欽定英訳聖書は文学上の一大傑作として英文学史上に重要な位置を占め、その文体は簡素にして威厳あり、力強くかつ韻律的である。そしてそれは Anglo-Saxon 系統の語を多く用いることによってその効果をあげているのである...聖書がイギリス人の生活の一部となり、その日常使っている英語に大きな影響を及ぼさずにはおかなかった...その影響たるや英語を色々な方面において、豊富にしかつ高尚優美ならしめるにあたって力があつた。聖書はイギリス人の今日の性格を築き上げたと同時に、英語そのものに雄健素朴なスタイルを与え、道徳的にも言語的にも非常な *inspiration* を及ぼしたといつてよい。」[新字体に変更]
- 4) 綴りに関して、中英語はもちろん、初期近代英語でも複数の異なる綴りが使われるが(例えば、*wroth*, *angry* 以外に、*wrooth*, *wrothe*, *angrie*, *angrye* など)、本稿では、便宜上 *OED* の見出し語 *wroth*, *angry* を使った。
- 5) Weigle (1950: 49-52) は、英訳聖書は他の誰よりもティンダルに負うところが大きいという。Gordon (1966: 96-97) や McKnight (1968: 111) にも同様のコメントがある。Gordon は、ティンダルは『欽定訳』のみならず、カパーデイル、『大聖書』、『ジュネーブ聖書』にも影響を与えていると言う(p.98)。永嶋(1988: 69) は「英訳聖書の王者ともいふべき AV(『欽定訳』)は、特に新約においては訳文の8割から9割までがティンダルに由来するといわれ、そして AV の伝統は今日の RSV(「改定標準訳」)にまで及んでいるのである」という。また Hughes (2000: 160) が、Tyndale の訳業は『欽定訳』の頃までには、“an institution”(「慣行」)になっていたという評価をしていることから頷ける。
- 6) 『欽定訳聖書』の編集方針のひとつに、『主教訳聖書』を基にするということがあるが(Wiegle, 1950: 19)、『主教訳』自体、ティンダルの影響を大きく受けている『大聖書』と『ジュネーブ聖書』の折衷訳と言われているので(寺沢他, 1969: 36)、『欽定訳』は近代初期の聖書群の総決算といつてもよいであろう。Wiegle(1950: 20)は、『欽定訳』は「1世紀近くの骨折りの熟れた果実」(the ripe fruits of nearly a century of labour)であると、Westcott という主教が1868年に書き残していると言う。
- 7) この時代、*angry* がまだ使われていなかったというわけではない。例えば、英詩の父チョーサー(c1343-1400)では、*wroth* 76, *angry* 15、ガウアーの *Confessio Amantis* (a1393) では、*wroth* 49, *angry* 3、*An Alphabet of Tales* (c1420) では、*wroth* 49, *angry* 14というぐあいである(拙論, 2005: 111)。また、*wroth* の用法に関し、“the strong veniaunce is wroth”というような表現が十数例あるが、この場合の *wroth* の意味は、“fierce, violent”であり、欽定訳では、“the anger is kindled”という訳になっているから、こういう例はこの調査からは除外した。

⁸⁾ 同時代の Skelton (c1460-1529) は *wroth* 4, *angry* 5、Udall の *Ralph Roister Doister* (c1553) では、*wroth* 2, *angry* 5である。時代的に少し前の Caxton (c1422-91) でも、*wroth* 23, *angry* 37、Robert Henryson (c1420/30-c1506) では、*wroth* 3, *angry* 7であり、いずれも *angry* の方が優勢になっている(拙論, 2005: 112)。割合的にはティンダルと類似しており、ティンダルの英語は当時の英語を反映していると言ってよいであろう。McKnight (1968: 113-114) は、ティンダルは庶民的なことば (popular idiom) や素朴な言語 (simple language) を使ったと言う。Daniel (2001) も、聖書はティンダルにより、人々の話している言語 (the language people spoke, not as the scholars wrote) によって書かれたとか (p.3)、ティンダルの使った英語は、物書きや法律家や教師の使った英語ではなく、人々の話し言葉だと繰り返し言う (p.356)。Nevalainen (2006: 38) も、Tyndale は庶民が理解できるように、基本的構文の平易さ (basic structural simplicity) を選んだと言う。

⁹⁾ この聖書では *wroth* は使われていないが、これは、同時代の Shakespeare (1564-1616) や Marlowe (1564-93) でも *wroth* が全く使われていないから (拙論, 2005: 112) 当時の語法を反映していると思われる。

¹⁰⁾ Hammond (1982: 87) は、カバーデイルの初期訳がどれほど『欽定訳』に入っているか (how much of Coverdale's original version makes its way into the 1611 text) は注目に値すると言う。

¹¹⁾ 上の2例の他にも、次の5例がある。「創世記」41: 10; 「民数記」16: 15, 31: 14; 「申命記」3: 26, 9: 19。

¹²⁾ 『欽定訳』の古語法については、寺沢他 (1969: 83-86) にも詳しい。但し、*wroth* が古語として使われているというような言及はない。

¹³⁾ 怒りの形容詞 (*wroth*, *angry*) は、「旧約」では合計103例、「新約」では11例である。「旧約」は「義」(righteousness) の書、「新約」は「愛」の書とか、「新約」の神は愛の神、「旧約」の神は怒る神であると言われるから、不義不正に怒り、糾すという意味で、こういう形容詞の出現頻度の差があるのかもしれない。

¹⁴⁾ 『欽定訳聖書』の翻訳に関わった6つの班(47名)と翻訳箇所は次のとおりである。ウェストミンスター第一班(10名)、「創世記」から「列王記第二」; ケンブリッジ第一班(8名)、「歴代誌第一」から「雅歌」; オックスフォード第一班(7名)、「イザヤ書」から「マラキ書」; オックスフォード第二班(8名)、「福音書」「使徒伝」「黙示録」; ウェストミンスター第二班(7名)、「ローマ書」から「ユダの手紙」; ケンブリッジ第二班(7名)、「外典」(Partridge, 1973: 106-108; 永嶋, 1988: 109-114)。

¹⁵⁾ 船戸英夫は、用語の選択については、グループ訳のため、方針が一貫していなかったと言う(寺沢他(1969)所収: 46)。また、寺沢も、「全体的調整は十分慎重に考慮されたけれども、結果的には各書の文体はけっして等質とはいえない。」と述べている(同書: 157)。

¹⁶⁾ 江川(1991: 362)には、「不定詞は時間的に未来を指向する動作・状態を示す」とあるし、安藤(2005: 261)も、「この種不定詞は、通常、その表す動作が「未来指向的」という特徴を共有している」と言う。

付表 『欽定訳聖書』における *wroth* , *angry* と共起する主語と動詞

旧約聖書				
	<i>wroth</i>		<i>angry</i>	
	主語	動詞	主語	動詞
創世記 4:5	Cain	was		
創世記 4:6	thou [Cain]	Art... ?		
創世記 18:30			LORD	let...be
創世記 18:32			LORD	let...be
創世記 31:36	Jacob	was		
創世記 34:7	they [the men]	were		
創世記 40:2	Pharaoh	was		
創世記 41:10	Pharaoh	was		
創世記 45:5			[ye]	[Be] ... !
出エジプト記 16:20	Moses	was		
レビ記 10:16			he [Moses]	was
民数記 16:15	Moses	was		
民数記 16:22	thou [God]	Wilt...be ?		
民数記 31:14	Moses	was		
申命記 1:34	LORD	was		
申命記 1:37			LORD	was
申命記 3:26	LORD	was		
申命記 4:21			LORD	was
申命記 9:8			LORD	was
申命記 9:19	LORD	was		
申命記 9:20			LORD	was
ヨシュア記 22:18	he [LORD]	will be		
サムエル記一 18:8	Saul	was		
サムエル記一 20:7	he [thy father]	if...be		
サムエル記一 29:4	the princes of the Philistines	were		
サムエル記二 3:8	Abner	was		
サムエル記二 13:21	he [king David]	was		
サムエル記二 19:42			ye [men of Israel]	Be... ?
サムエル記二 22:8	he [God]	was		
列王記一 8:46			thou [God]	if...be
列王記一 11:9			LORD	was
列王記二 5:11	Naaman	was		
列王記二 13:19	the man of God	was		
列王記二 17:18			LORD	was
ここまでウェストミンスター第一版が翻訳				
歴代誌二 6:36			thou [LORD]	if...be

歴代誌二 16:10	Asa	was		
歴代誌二 26:19	Uzziah	was		
歴代誌二 26:19	he [Uzziah]	was		
歴代誌二 28:9	LORD God	was		
エズラ記 9:14			thou [God]	Wouldest...be ?
ネヘミヤ記 4:1	he [Sanballat]	was		
ネヘミヤ記 4:7	they [Sanballat et al.]	were		
ネヘミヤ記 5:6			I [Nehemiah]	was
エステル記 1:12	the king	was		
エステル記 2:21	Bigthan and Teresh	were		
詩篇 2:12			he [God]	lest...be
詩篇 7:11			God	is
詩篇 18:7	he [God]	was		
詩篇 76:7			thou [God]	when...art
詩篇 78:21	LORD	was		
詩篇 78:59	he [God]	was		
詩篇 78:62	He [God]	was		
詩篇 79:5			thou [LORD]	Wilt...be ?
詩篇 80:4			thou [LORD]	Wilt...be ?
詩篇 85:5			thou [LORD]	Wilt...be ?
詩篇 89:38	thou [God]	has been		
ここまでケンブリッジ第一班				
箴言 14:17			He	is
伝道の書 5:6			God	should be
伝道の書 7:9			[thou]	to be
雅歌 1:6			my mother's children	were
ここまでケンブリッジ第二班				
イザヤ書 12:1			thou [LORD]	wast
イザヤ書 28:21	he [LORD]	shall be		
イザヤ書 47:6	I [Isiah]	was		
イザヤ書 54:9	I [LORD]	would be		
イザヤ書 57:16	I [LORD]	will be		
イザヤ書 57:17	I [LORD]	was		
イザヤ書 57:17	I [LORD]	was		
イザヤ書 64:5	thou [LORD]	art		
イザヤ書 64:9	[LORD]	Be... !		
エレミヤ書 37:15	the princes	were		
哀歌 5:22	thou [LORD]	art		
エゼキエル書 16:42			I [Ezekiel]	will be
ダニエル書 2:12			the king	was
ヨナ書 4:1			he [Jonah]	was

ヨナ書 4:4			thou [Jonah]	to be
ヨナ書 4:9			thou [Jonah]	to be
ヨナ書 4:9			I [Jonah]	to be
ここまでオックスフォード第一班				
エドラス書一 1:52	he [God]	being		
エドラス書一 8:88			thou [LORD]	mightest be
エズラ書四 8:45	[God]	Be... !		
エズラ書四 16:48			I [LORD]	will be
トビト記 5:13			[brother]	Be... !
ユデイト記 1:12			Nabuchodonosor	was
ユデイト記 5:2			he [the captain]	was
シラ書 19:17			[thou]	being
シラ書 20:2			[one]	to be
ベルと竜 1:8	the king	was		
ベルと竜 1:20			the king	was
ベルと竜 1:20			[LORD]	Be... !
マカバイ記一 6:28			he [the king]	was
マカバイ記一 9:69	he [the king]	was		
マカバイ記一 11:22			he [the king]	was
マカバイ記一 15:36	the king	was		
マカバイ記二 5:17			LORD	was
マカバイ記二 7:33			LORD	though...be
ここまでケンブリッジ第二班				

新約聖書				
	<i>wroth</i>		<i>angry</i>	
	主語	動詞	主語	動詞
マタイ伝 2:16	Herod	was		
マタイ伝 5:22			whosoever	is
マタイ伝 18:34	his lord	was		
マタイ伝 22:7	he [the king]	was		
ルカ伝 14:21			the master of the house	being
ルカ伝 15:28			he [elder son]	was
ヨハネ伝 7:23			ye	Are ... ?
ここまでオックスフォード第二班				
エペソ人への手紙 4:26			ye	[if]...be
テトスへの手紙			[a bishop]	[must be]
ここまでウェストミンスター第二班				
黙示録 11:18			the nations	were
黙示録 12:17	the dragon	was		
ここまでオックスフォード第二班				